

# DRAMA かながわ 65

神奈川県演劇連盟事務局・横浜市中区福富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866



## 第9回神奈川演劇博覧会 日時:2012年3月17日(土)~20日(火・祝) 会場:神奈川県立青少年センター ホール

第9回神奈川演劇博覧会(以下「演博」)が今年3月17日(土)~20日(火・祝)で開催され終了した。第8回演博は東北地方太平洋沖地震の影響を受け残念ながら中止となったため、今回は2年ぶりの開催となる。私はかつて演博の実行委員長を務めていたが、今回は当日に受付を担当しながらいくつかの公演を観劇するという程度のかかわりであった。しかしその代わり、これまでよりも、演博を客観的に見る事ができたような気がする。では、今回の演博の非常に簡単なレビューと、これからの展望について少々書いておこうと思う。

### 楽しさの伝わる交流

実行委員長の佐藤氏は、相鉄本多劇場での開催だった第1回~3回でも委員長を務めており、「イベントの演出について出演日ごとに劇団間で打ち合わせを設け〜」というような話はうわさには聞いてはいたのだが、実際にどのようなことが行われているのかを目の当たりにするのは、私に

とって実は今回が初めてだった。といっても手の込んだ演出ではなく、最後に全劇団が出てきて挨拶をするという程度のものであったのだが、それは観ていて楽しく、交流が観客にも伝わって、気持ちのいいものだった。とくに2日目ラストの挨拶は見事。打ち合わせを密にしたような痕跡はまるでなかったのだが(失礼!)、TEAM5 8代表・川田氏の仕切りには「若いのにしっかりしてるなあ」とオッサンは妬んだものだ。また、私は残念ながら見る事ができなかったのだが、我が県演連の螺旋階段公演前に今回の演博での上演画像をプロジェクターで上映するという緑氏のアイデアは、観客に訴えるものがあつたのではないだろうか?また、劇団北口改札とG/9-Projectの出演日である3日目を、自ら「不条理デー」と謳っており、その偶然を売りにしていることも印象的だった。これは事前の打ち合わせの賜物であつたのだろう。

演博の目的のひとつに「劇団間の実のある文化的交流」というものがあるが、ただお互いに芝居を観劇し合うのだ





演博の目的のひとつに「劇団間の実のある文化的交流」というものがあるが、ただお互いに芝居を観劇し合うのだけではなく、小さなことでも一緒に作業をすることで生まれる交流は、それぞれの今後の活動に活かしてほしいものだ。

### バラエティゆたかな顔ぶれ

さて上記の2日目は、個人的には未見の劇団が2団体出演するというので、非常に楽しみで、観たあとに「県内にはまだこんなに劇団があったのか」と、過去にアンケートでいただいた意見と同じことを私が考えていたことに気づいた。とくにヘンテコカサナルの「アシュラカメレオン」のテンションは目を見張るものがあり、今後の活動は今のところ未定ということだったが、その活動に期待大。また、制作者としてはいつも言ってしまうことなのだが、今回の演博ほどバラエティゆたかな顔ぶれとなった回はなかったのではないだろうか。ストレートプレイから朗読劇、即興劇、不条理劇、英語劇。劇団の性格も、劇場付属劇団や市民ミュージカルを母体にした劇団など。また幅広い年齢層を感じた。偶然にしても面白い。

アンケートは概ね好評で、公演別に言えば、上記のヘンテコカサナルと螺旋階段がとくに評価されていたようである。また、昨年の中止のことにも触れ、今年は観劇することができて嬉しいと喜びの言葉も多くいただいた。まだまだ少ないながらも、演博を楽しみに待っていらっしゃる方がいるというのは、心強く、励みになる。

無事に楽日を迎え終了し、バラしてその日のうちに打ち上げ。私も畏れながら参加させていただいたのだが、やはり多くの演劇人との交流に興奮し、記憶が正しければ、劇団やぶさかの海老原氏、湘南テアトロデラルテの仲野氏からんでいたと思うのだが…。この場を借りてお詫び申し上げます。

### 今後の課題

ということで今回の演博は成功したと考えていいと思われる。しかし同時に不満もある。ひとつは動員。とはいえ今回は各劇団2回でなく1回公演で、さらに昨年の中止による影響もあると考えるので、今後どのように回復するかは次回以降の課題だろうか。

そして、私もあまり関わるができなかった今回の演博だが、県演連は実際どのくらい関わっていたのだろうか？というのがもうひとつの不満。いや、そもそも関わりでいったら、これまでもそれほど多くのメンバーにバックアップを受けていた印象はないのだが（当然バックアップをいただいたメンバー、劇団には大いに感謝しているが）、今回は現場にいても、県演連メンバーの来館者が少なかったように思う。県演連主催の事業にもっと興味を持っていただきたいし、興味を持っていただける演博にならないといけない。



後日反省会が開催され、ありがたいことに参加劇団から忌憚のない意見をいただいた。「1公演よりも2公演」「GPは前日までに余裕を持って」など、過去の参加回と比較した意見から、「演博の目的をしっかりと共有したい」など運営体制の改善を求める意見もあったが、「公演当日、公演前にトークショーを行ってはどうか?」「本番1ヶ月前くらいに場所を押さえて公開稽古を行えば、ほかの参加劇団がどういう劇団なのかをあらかじめ知ることができる」など前述の「劇団間の実のある文化的交流」に対して前向きな意見もあり、終了したイベントに関わらず、それぞれの劇団が意欲を持っていることを感じた。と同時に、今回の演博を開催した意義というものを改めて考えた。

こんな演博だが、いつの間にか次回はなんと第10回である。まだまだ発展途上のイベントであるが、今から期待に胸が膨らむ。

編集部/関口素実



# 「神奈川演劇博覧会を終えて」

神奈川演劇博覧会。

親しみを込めて、演博と呼ばせていただいています。かわいいです。色もカタチも違った劇団が、こんなに近くに、こんなにたくさんあって、一緒に演博に向けて頑張れる。これって、凄い事だと思います。今回もその輪の中に入れた事が嬉しいです。ありがとうございます。

四ッ葉屋は、今回演博2回目。いたってシンプルな『お家(ウチ)でのおはなし』をお届けさせていただきました。大きな事件は起こりません。人生の一大イベントは起りましたが、…立派な事件ですね。ごめんなさい、起こりました。(笑)あたり前にいる家族。一人ひとりにあたり前に訪れる出会いや躓き、葛藤、大きな壁が一瞬で壊れていく感覚。ありふれた日常の中、ちいちゃな幸せを見失わず拾っていただけたら。と、思います。

そのお手伝いができるように、次回作もまた変わらず、でも成長していきながら頑張っていきたいと思います。

演博では、舞台を創る演出家さん、大切な演者さん、無くてはならない裏方さんとの交流と、初めましての観客さんとの出会いがあります。本番中のリアクションもそうですが…アンケートは特に大切に、隅々まで読ませていただきました。1対1で会話をしているような、お客様と、



とても近い距離に感じます。

思いもよらない方向からお褒めの言葉をいただいたり、がつんと頭の上に言葉が降ってきたり。同じ時間を共有してるからこそその感覚です。次回も、その次も、そのずっと先にも、演博で、お芝居に関わる人のたくさんのお会いと共有があれば素敵だなと思います。一人でも多くの方に、お芝居の楽しさが伝わりますように。

劇団四ッ葉屋／佐々木絵梨子

『演劇博覧会』。今回、初めて参加して感じたことは、参加劇団みんな若い!!そして男子が多い!! 当劇団にはイケメンもジジメンもいないので、世の中にはこんなに芝居好きの男子がいるのかと、心ワクワク、あの紅葉坂を軽やかなステップで登ったのを思い出します(笑)。

冗談はさておき、そもそも今回参加を決めたのは 当劇団は0回公演を含め計2回、そして今年の9月には 3回



目の公演をいたしますが、そのすべてが人情喜劇。と、そこで私は 演博に出ることにより、普段エルブではやれないものをやりたい!と強く思い、団員の意見も聞かず申し込んでしまったという、完全なる静稀のわがまま企画でございました。楽しいお芝居も大好きですが、去年は東日本大震災という大変心の痛む出来事がありました。

今回、演目に選んだ『千羽鶴幻想』は、戦争によって引き裂かれた親子の話でした。天災か人災かは違っても、一瞬にして引き裂かれた家族。この悲惨な出来事を、平和な毎日が続いても忘れてしまわないように、こういう事態に直面してこそ生まれた、人と人との絆も、時間とともに忘れてしまわないように、そういう思いでやらせて頂きました。朗読劇というものも、初めての経験でしたが、またぜひ演劇博覧会で発表出来たらと思います。

演博は、とても素敵な発表の場です。ずっとずっと続けてくれることを願います。

劇団エルブ／静稀香那



# 2012年

風雲かぼちやの馬車 西田恵実

## 青少年のための芝居塾 記念公演 始動



2012年5月12日(土)、ついに2012年の「青少年のための芝居塾 記念公演」に向けて、開講式が行われました。高校生のための芝居塾から、より多くの青少年に向けた企画として、2010年に第1回を迎えたこの芝居塾の企画も今年で3回目を迎えます。今年も、風雲かぼちやの馬車が担当させていただくことになり、劇団員一同、感謝の気持ちでいっぱいです。今年の芝居塾のメンバーは、45名の塾生と劇団員、客演の方々を含め、総勢60名の大所帯です。顔ぶれを見ると、高校生から29歳まで、非常に幅広い年齢の青少年が集まっており、それぞれ強い個性を持っているように見受けられます。毎年、このメンバーでの公演は二度とないという気持ちで、精一杯公演を楽しみ、お互いの個性をぶつけ合ってきました。私たち劇団員も、このメンバーと一つの芝居を創り上げること、ぶつかり合うことが楽しみでなりません。



今回の「記念公演」は、今まで芝居塾の公演を行なっていた、神奈川県立青少年センターの多目的プラザからホールへと場所を移しての公演となります。ホールでの公演ということ、また今までにない多くの参加者が見込まれたこともあり、作品を検討いたしました。今までの芝居塾では、シェイクスピアの作品を題材にした演目を上演してまいりました。しかし、今回は風雲かぼちやの馬車の劇作家である重信臣聡が、この記念公演のために書き下ろした新作、『紅い海、剣と十字架～天草四郎物語～』を上演することにいたしました。日本歴史上、最も大規模な一揆であったと言われる島原の乱で、若干16歳にして370000人を率いて十字架を掲げて戦闘を指揮したと言われる「天草四郎」。彼と彼を取り巻く人々の生涯を題材に、参加して下さるメンバーの皆様と新たなチームを作り上げ、風雲かぼちやの馬車と芝居塾参加メンバーで「歌って、踊って、人を斬る」作品を創り上げていきたいと考えております。

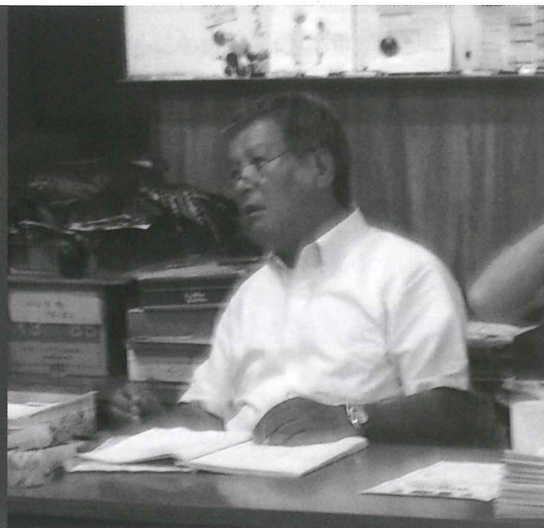
芝居塾の塾生には、ホールという大きな舞台と大勢の観客の方々の目の前で公演を行うことのできる今回の機会を存分に活かし、楽しんで参加してもらいたいと考えております。私達劇団員も、芝居塾生の限らない可能性や、勢い、それぞれの個性とのコラボレーションを楽しみながら全員で一丸となって大きな舞台で素晴らしい化学反応が起こる事を楽しみにしています。この記事を読んでいた皆様には、ぜひその化学反応の結果を当日の劇場でご確認いただければと思っております。青少年の溢れるエネルギーをぜひ、お楽しみください。皆様のご来場、心よりお待ちしております。



# 潜入!! 横浜演劇界の重鎮 劇団かに座

某日、私は横浜演劇界の重鎮である「とある劇団」に取材を行う為、横浜駅に降り立った。横浜駅西口から平沼高校に向かって歩くと、その場所はあった…「ここにあるもの、ここにしかないもの、今日は何を取材出来るのか」楽しみで仕方ない。

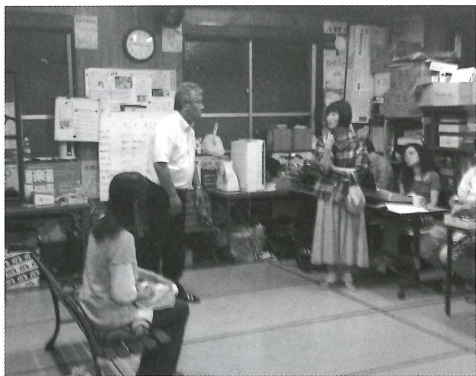
取材：海老名信吾（劇団よこはま壱座）



劇団かに座の稽古場近づき、道路から入り口まで歩いていくと玄関前に人影があった、稽古場では別のシーンを稽古中であるため、自主的に稽古を行う姿であった。その姿は演劇に真摯に向かう劇団かに座らしい光景だ。ふと私に気が付くと自主稽古を中断し対応してくれ、私が取材に来た事を告げると、快くドアを開けて稽古場へと誘ってくれる。稽古場のドアが開くと、次回公演 堤泰之 作「見果てぬ夢」の稽古真最中であつたが、主宰の田辺晴通氏を始め、本公演の演出である馬場秀彦氏、他の劇団員は暖かく迎えてくれた。

しばらく、劇団かに座の稽古を楽しく見学…いやいや取材させてもらうことにした。

稽古中は制作の作業は行うものの、参加するすべての劇団員は互いの芝居を食い入るように見つめていた。当たり前なのだが、ゲームをする劇団員（これは、とある劇団に居ると「風の噂」に聞いたのだが…）がいるこのご時世に、当たり前なことが出来るということはさすがである。段々と稽古に熱が入るにつれて演出の馬場氏からもダメ出しが飛ぶ、台詞廻しだけではなく、細やかな仕草にまで気を遣う演出、言葉で伝え辛い事、伝えられない感情には、演出自らが実際に演じていく、その姿に巧みな



な技術と培った経験を感じ、それを受ける役者達は、伝えられた想いに応えようと努力する、芝居や演劇とは斯くもありたいものだ。



時が経つのは早く（いや記者が取材に行った時間が遅いのか？）稽古が終わりとなってしまった。稽古が終わり、「見果てぬ夢」で主演男優を演じる折笠安彦氏はこう言った。「様々な人たちが何かしらを抱えて生きている。様々な形の苦悩を抱えている色々な人たちが『見果てぬ夢』を追いかける姿、そういったところで観てくれた皆さんに元気が与えられるような芝居だと思います。」

観劇した人への想いを語る姿は、かに座が目指す「観客と響き合える舞台を創っていく事、演劇の日常化」そのものだと感じた。最後に折笠氏はかに座という劇団に関してこう言っている「劇団かに座の真面目な舞台作り、一つの芝居に対して正面から向かっていく姿勢、脈々と受け継がれている観客に対し声をきちんと届かせる事が『かに座』の魅力です。もっと多くの人たちに見て頂きたいですね。」

稽古中に見られた劇団員の真摯な眼差しは、脈々と受け継がれたものなのだろうと感じられる言葉であった。

取材が終わり帰ろうとした時に田辺氏からの御好意で劇団員と酒を酌み交わす事ができ、芝居談議に花が咲いたのは言うまでもないのだが、それを記事にするのは野暮というもの…（決して、酔っぱらって忘れたわけではない。断じてない。）



記者が飲みか…取材を終え帰路に着いたとき、ふと稽古場で主宰 田辺氏が言った言葉を思い出した。

「仕事で忙しい人がいるのも分かっているが、その分頑張ってくれている人もいる。その人達への感謝を忘れないように」

その通りだ、胸が痛い…と、記者の事はさておき、忘れがちな事かもしれないがその気遣いこそが、かに座が観客を集める所以なのだと感じた。



# 編集長が斬る!

編集長が神奈川県演劇連盟取材する連載企画

## 第2回 劇団やぶさか 海老原あい

「演劇のピースが全てはまったときの達成感」  
女性だけの劇団を率いてファンタジーの世界を創作している。  
劇団やぶさかの脚本兼演出家。まさに神奈川県演劇連盟の宝塚である。  
彼女が演じ、まさに神奈川県演劇連盟の宝塚である。  
常にオリジナルを発表し続けている彼女はどんな思いを持っているのかを取材させていただきました。

### 演劇との出会い

—演劇を始めたきっかけを聞かせてくれますか？

演劇をはじめたのは大学からです。その前に中学・高校のクラブでラジオドラマをやっていました。あ、演出を初めてやったのはこのラジオドラマです。配役の面白さや選曲が面白いなあって感じましたね。演劇部もあったのですが、敷居が本当に高かったですね。

—大学で演劇部に入ったときは演出志望ですか？

うーん、そうですね。演出したかった。演出やってみたいという思いはありました。でも、役者もやっていました。

—え？役者もやっていたのですか？

え、はい、やっていました。大学時代に入ってきたインカレの劇研、他、大学の演劇部で卒業生として演出をしていた時も役者をちょこっとやっていました(笑)

—その頃から脚本も書いていたのですか？

そうですね。大学の3年生ぐらいだったかな？その頃から書いていました。演劇をはじめたときから先輩方が既成の脚本を使用して演劇していなかったの、既成の脚本で演劇するイメージがあまりないです。大学で自分が書ける順番が回って来たときに書いたのが最初だった気がします。

—ところで演劇以外は何かやっていたのですか？

えーと、私、昔はいろいろやってみました。漫画も描いたし、小説も書いたし、映像に出てみたり、バンドやってみたり、興味のあることはやりました。

—え？バンドですか？海老原さんが？

あ、でもライブが嫌いなボーカルでした。スタジオ箏っついでいようよ。って感じです(笑)

七年ぐらいやっていたんですよ。でも、何をやっても大変だなあと感じてしまっ。飽きっぽいのもあるかもしれないですけど。演劇だけは続けられています。

### 劇団やぶさかについて

—劇団やぶさか結成について教えてください

フェリスの演劇部がありまして、卒業生として演劇部の脚本・演出をやっていました。その演劇部の子達が卒業しても演劇やりたいとなったみたいで、電話がかかってきました。「劇団を立ち上げるから脚本・演出よろしくね」と、これが結成したときですね。

—きっかけとしては唐突でも劇団やぶさかはもう長くなりましたよね？

そうですね。十年以上続いていますよね。もちろん途中、

解散の危機はありましたよ。喧嘩したりしましたし、今はそうならないように頑張っていますけど。

—大きなものとして劇団やぶさかはあると？

そうですね。本当に心の中に入っていますね。

### 演出・脚本家 海老原あい

—演劇をやってきて何が一番楽しいですか？

うーん、ピースがはまったときですね。脚本をば一つと書いて、音楽はこれ、演出はこうなのって劇団員に伝えて、役者の演技がぴたとなった時が一番好きです。この達成感がいいですね。私、たぶん人のために芝居を創っていると思います。自分だけのためだったら絶対やってないですね。皆がいるから楽しく出来ていると思います。

でないとなら、自宅からわざわざ出てこないですから(笑)

—脚本について教えてください

作品の世界をイメージして書き始めています。アラビアンだったり中世だったり。劇団やぶさかはきっと冒険譚が好きなのですね。劇団員がやりたい作品を書いてあげたいと思っています。結論はあまり最初考えてないですね。盛り上がりのシーンをイメージして書いていますね。もがいて、もがいて、もがく姿が感動に繋がると思います。

—もし書けるなら書きたい作品はありますか？

俳優が出る芝居です。あ、劇団員に怒られるかも(一同爆笑)

海老原あいにはネガティブ。これは取材する前に持っていた印象でした。しかし、稽古を見学し制作業務もやっている彼女はとて前向きに演劇に取り組んでいて、そのギャップを感じられたことにこの取材の価値があったと思っています。彼女の生きてきた時間はここに書ききれないぐらい濃密で明と暗の両方を持っていました。海老原あいは今後もファンタジー世界を書き続けるとは思います。僕が僕がいつか「海老原あい物語」を書いてあげようと思います。

DRAMAかながわ編集長 緑慎一郎



#### 海老原あい プロフィール

劇団やぶさか主宰・脚本・演出家  
中学・高校・大学と全て女子校に通い、女の園の酸いも甘いも噛みわけて今に至る。紆余曲折を経て主宰となった劇団も女性劇団＝ほぼ女だらけ。一見、女性の味方が多いようだが、しかし敵も殆どが女である。女の園の中に居ると、むしろ男らしくなっていく女性の性質について現在鋭意考察中。



# 劇団探訪

神奈川には県演連加盟劇団以外にも数多くの劇団があります。芝居を観劇しながら、いろいろな劇団取材してご紹介します。今回は「劇団T-cob」です。

今回は、横浜を中心に活動する劇団T-cobを紹介。代表の井上氏はかつて劇団麦の会にも在籍していたこともあり、なにかと県演連にも縁があるお方です（そういえば、かつて関口と共演したこともありでしたね）。第5回演劇博覧会での公演はコメディとしても出来がよく、観客はもちろん出演劇団の受けもよかったのを思い出します。

取材：関口素実

## 2000年劇団創立

劇団T-cobは、横浜市立大学の演劇サークル「劇団TYXH(テューケ)」に在籍していたメンバーが、卒業後に活動の場を求めて2000年に立ち上げた劇団です。「劇団T-cob」という劇団名は、その「TYXH」のOB→TYXHOB→T-cobということにつけられたそうです。創立当初はSTスポットを拠点に、劇団員のオリジナル脚本による公演活動を行っていました。

## 社会人劇団の縮図

稽古は横浜市内のコミュニティセンターで行われていました。今回の公演は既製の台本を使用し演出は井上氏。キャストは6名で、その中に芝居塾生でもあった、青野氏、板倉氏を発見。う〜ん世間は狭い、というか演劇界は狭い。改めてチラシを見ると、かつてT-cobの公演に出演していた役者が圧倒的に少ないことに気づく。「今劇団員は何人？」と聞くと「ここ最近では公演毎にメンバーを募る形になっています。プロデュース公演ですね。」と井上氏は語る。かつては固定のメンバーで活動していた劇団だったが、現在のスタイルになった経緯を聞いてみました。



「学生の頃と違い、時間も居住地もバラバラになり、活動当初は稽古場が埼玉だったことも。その後、稽古は日曜日だけとなり細々と続けたものの、数年経つと結婚や仕事、育児に介護等でメンバーが抜けていきました。同世代しかない団体の弱点ですね。」

多くの劇団が持つ悩みを、やはり抱えているご様子。結婚・育児なんて言葉を聞くと、まるで社会人劇団の縮図を

見ているよう。そういった人生の転機をきっかけに活動を休止する劇団を私も多く見ている。

## プロデュース劇団へ移行

となるとT-cobも解散していたとしてもおかしくないのだが、幸いにもT-cobは活動をやめることなく続けている。

「TYXHの後輩、演劇博覧会やワークショップなどで知り合った方など、いろいろな方にご協力いただきながら、なんとか公演を行なっている。」

井上氏の見かけによらず（失礼！）意外と演劇活動に意欲的で、劇団以外の活動も多いのです。そういえば劇団の母体となった劇団TYXHの「TYXH」とはゲーテの詩から引用しており、「偶然」を意味するそうです。井上氏によると「偶然に出会えた人達で作品を紡げることに日々感謝している。」とのこと。残念ながら現在劇団TYXHは存在してませんが、T-cobはその遺伝子をしっかりと受け継いだからこそ活動が継続しているのかもしれませんが。

「劇団員と違って、各々経験してきたものが違うので、とても刺激になる。また身内同士では感覚で伝えてきたことを言葉にする難しさと大切さを実感し、やりとりを楽しんでいます。劇団活動は今後も細々と続けられれば…と思っています。出会いを大切にしながら、楽しい時間をお客様と共有できる、そんな空間を提供できれば、幸いです。」





# 僕らの演劇

## 劇団「横綱チュチュ」

「うりこひめとあまんじゃく」民話 作:大西智絵

2月21日 於:杉田小学校  
3月24日 於:杉田地区センター  
4月22日 於:浜中コミュニティハウス  
5月12日 於:屏風ヶ浦小学校はまっこスクール  
5月13日 於:洋光台地域ケアプラザ

**劇** 団「横綱チュチュ」のお芝居は、これで5回目の観劇だったと思います。端的に言って、手作り感あふれるあたたかいお芝居でした。満足・満喫できました。客席には、多くの親子が体育座りをして観劇していました。私が小学生の頃、かろうじて存在した紙芝居を食い入るように見入っていたあの頃を思い出しました。



チュチュのお芝居は、いつ観てもほのぼのと、ホッとします。役者・スタッフの醸し出す雰囲気があたたかい。

観劇する親子連れ、お客様があたたかい、杉田は商店街が健在で街の雰囲気もあたたかい。

演技、踊り、駄洒落も交えたセリフ、空気感、どれも〇でした。創作活動の原点・原風景を見た思いがしました。また是非観にいきます！素敵なお芝居、ありがとうございました。

劇団川崎演劇塾 なん

## まりこ☆みゅーじあむ

「朗読の時間」 4月21日 於:相鉄本多劇場

**春** をテーマにした朗読劇。チラシの印象どおり居心地よく落ち着いた空間が作られていた。座席に置かれていたクッションがありがたく、おもてなしの雰囲気を満喫した

がら開演を待った。

1つめの演目は「風景 山村暮鳥・作」。「いちめんのなのはな」が繰り返されるフレーズ毎に出演者全員がそれぞれの形で言葉を表現する。「いちめんのなのはな」「いちめんのなのはな」出演者が舞台を動き回る。朗読劇って、座って本を読むだけではないんだと、出だしから印象が変わった。



2つめの演目は「名前 角田光代・著」川井眞理子さんのひとり朗読。最後の照明の転換で舞台が赤く染まる桜のシーンが印象的だった。

中盤、3つめの演目は「いつか、ずっと昔 江國香織・著」恋人とデートをしていた女性が、生まれ変わる前の恋人たちと出会う不思議なお話。女性と今の恋人、そしてそれぞれの生き物達を代わる代わる演じる。へびでも豚でも貝でも恋人が必ずいる、幸せな恋をしている女性の心象を、やさしくあたたかく読み上げていた。

4つめの演目は「～春のおいしいもの～」春の料理と作り方を紹介しながら、それにまつわる詩の一部を出演者が個々に朗読。ユーモアのある構成だった。それとともにお腹がすいてきた。

最後の演目は「さくら地蔵 重松清・著」。出演者全員が座った朗読劇の本領といったシンプルな構成であり、お話は、春のテーマにあった爽やかな幕であった。

公演全体がテーマのイメージ通り、ゆるやかで心地よい空気が流れ、そこに身を落ち着けて朗読の声に耳を傾ける行為に、安らぎと癒しを感じた。

最後に、感情表現に入り込まれていたためか、聞こえづらい部分があったのが気になり、残念であった。

劇団「横綱チュチュ」:伊藤俊之

## 編集後記

今回は演劇博覧会や芝居塾など演劇連盟の存在を県の内外に知っていただく機会となりやすい事業について取り上げました。参加者を広く募っているイベントなので、ポスターや募集チラシ、ネットなどで目に触れる機会も多いと思います。観劇だけしたいという方にとっても、演劇博覧会や芝居塾は演劇に気軽に触れる機会です。ぜひ、もうすぐ芝居塾なので、お友達やご家族と一緒に夏休みのお出かけの一環としてご予約に入れてみてはいかがでしょうか？また、今回はいくつかの劇団のお

話を直接うかがったことで、どんな雰囲気かちょっとだけですが、伝わったと思います。かくいう私もあまりほかの劇団にお邪魔する機会がないので、稽古場の雰囲気を垣間見ることができるのが、毎回楽しみだったりします。劇団というと「敷居が高い」とか「劇団に入りたいのにご家族の反対にあっている」とか、そんな話をたまに耳にしますが、少しでもそういった不安や誤解を取り除く一助となれば幸いです。

編集部:浅水真子

### 神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
- 劇団こゆるぎ座●劇団麦の会●劇団やぶさか●劇団「横綱チュチュ」●劇団よこはま壱座
- 風雲かぼちゃの馬車●まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクト●横須賀市民劇場プロジェクト●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第65号] 発行日:2012年5月31日 発行:神奈川県演劇連盟  
編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)